探険が侵略に変わる時
――イギリスが300年狙ったギアナ高地

山田 篤美

ジェームズ・キャメロン監督のＳＦ映画『アバター』(2009年)は、地球人が希少資源を求め遠い宇宙まで侵略に行く話。地球人が征服しようとした先住民族ナヴィ族は、毒矢を使用し、ハンモックで寝る裸の部族。それは大航海時代においてヨーロッパ人が邂逅した新世界のインディオの姿そのものだった。ナヴィ族には尻尾があったが、尻尾はヨーロッパ人が異境の人々に求め続けた表象である。私は、ＳＦ映画にこのような陳腐な被征服者のイメージを作り上げたハリウッドの発想に驚いた。

ただ、映画の風景は素晴らしかった。霧に煙る熱帯雨林から浮かび上がる赤岩の絶壁。そこから流れ落ちる迫力ある滝。その雄大な光景の中を主人公やナヴィ人が翼竜に乗って飛翔する。私は壮大さに圧倒されながら、この光景はまさしくギアナ高地であり、西洋人はギアナ高地が好きなのだと、改めて認識したのだった。

ベネズエラのギアナ高地――人々の心の中に探険のロマンを呼び起こす魅惑の地。ギアナ高地の本来の意味は、オリノコ川南岸の標高の高い土地のこと。しかし、今日ではエンジェル・フォールズやギアナ最高峰のテーブルマウンテン、ロライマ山（図1）などが「ギアナ高地」である。ギアナ高地に憧れる多くの人は、そこは人類の歴史と無縁のまま、自然の中に残された地球最後の秘境であると思っているだろう。実際、コナン・ドイルはロライマ山をモデルに『失われた世界』(1912年)を書いたが、そこでは死滅したはずの恐竜が生き残っていた設定だった。

図1　垂直の壁が登山者を阻むロライマ山
出典：C. Barrington Brown, *Canoe and Camp Life in British Guiana*, 1875.

しかし、ギアナ高地は、映画の『アバター』同様、資源のための侵略の舞台となった土地であった。私がその侵略の痕跡に気づいたのは、夫の仕事の都合でベネズエラのオリノコ河畔の地方都市シウダド・グアヤナに滞在したのがきっかけだった。シウダド・グアヤナの「グアヤナ」は「ギアナ」という地名のスペイン語。この町はエンジェル・フォールズへの観光拠点であると同時に、この地の資源開発のために造られた工業都市である。

さて、私のシウダド・グアヤナの生活は、変化に乏しい単調なもので、週末には夫とドライブするのが楽しみだった。ただ、どこを走ってもたどりつくのは、シモン・ボリバル広場と数軒の店しかないような小さなさびれた村々ばかり。この世に歴史から忘れられた地域があるとしたら、それはここに違いないと私は勝手に思っていた。

とはいえ、ひとつ気になっていたのが、グアヤナ地方の東部にエルドラドという名前の村があることだった。エルドラドは「金色の王」あるいは「金色の王の国」という意味のスペイン語で、日本語では「黄金郷」と訳される。その言葉には、緑の密林の中で黄金がきらきら輝く幻想的なイメージがある。

名前に惹かれてエルドラドに行ってみたものの、そこは黄金郷でも何でもなく、市内の目抜き通りにガソリンスタンドと数軒の店がある程度の閑散とした村。不可解だったのは、この村を流れる川の中洲に刑務所があることだった。エルドラドという素晴らしい名前の土地がなぜ刑務所なのだろう。

一方、グアヤナ地方にはエルカジャオという金鉱の村も存在した。しかし、こちらも豊かなイメージとはほど遠いひなびた村で、金の採掘人はなぜこれほど貧しいのだろうかと考えさせられる所であった。2013年10月の水俣会議で、ブラジルの金採掘による水銀の環境汚染が話題になったが、このエルカジャオでも同じ問題が起こっていた（図2）。しかも、金の採掘人には水銀中毒の症状も現れていた。

金が採れるエルカジャオと刑務所の村エルドラド。これらは一体どういう沿革の町で、両者は何か関係があるのだろうか。これが私の第一の疑問だった。

もうひとつ気になったのが、16

図２　エルカジャオの金採掘人が行うアマルガム法。写真：山田篤美

世紀末にイギリス人サー・ウォルター・ローリーがオリノコ川にやって来て、エルドラドと呼ばれるギアナ帝国を探した史実があることだった。ローリーといえば、エリザベス一世の寵臣である。その人物のオリノコ川探険は違和感があり、背景が気になっていた。

ベネズエラに滞在中、何気なく感じたこうした疑問。そこから私の文献渉猟は始まった。スペイン語や英語の一次史料、一九世紀の新聞、雑誌を徹底的に調査した。

浮かび上がってきたのは、ローリーのオリノコ川探険を皮切りに、オリノコ川南岸を領有しようとしたイギリス300年の野望であった。ローリーの試みは失敗したが、その後、イギリスははるか南方のエセキボ河口に英領ギアナを創設。ここからオリノコ川南岸を狙い続けた。19世紀半ば、エルカジャオという産金地が発見されると、イギリス帝国主義は牙をむいた。

エルカジャオ領有計画の戦略となったのが探険だった。イギリス人はオリノコ川南岸の人跡未踏の地に分け入って、土地を測量し、地図の空白部分を埋め、英領ギアナの領土を拡大した地図を作製していった。

彼らはヨーロッパ人として初めてギアナ最高峰のテーブルマウンテン、ロライマ山を発見し、登頂も試みる。当初は垂直の壁に阻まれて、登頂できず、憧れだけが募っていった。しかし、1884年、ついに山頂に到達。当時のヨーロッパ人の考えでは、最初にその地に達することが、土地領有の権限だった。テーブルマウンテンの平らな山頂は人跡未踏の地であった。こうしてロライマ山は「イギリス人によって発見され、イギリス人によって踏破されたので、イギリスの山である」と宣言されることになった。さらにイギリスはこの山への到達を大義名分として、広大なギアナ地方の領有も主張する。測量、地図作成、登山など、探険にかかわるあらゆる行為が侵略と結びついたのが、ロライマ山であり、ギアナ地方だった。

1890年、イギリス政府は王手をかける。金の町エルカジャオを得るために、100キロ南方のクユニ河畔に前線基地を設立したのである。ベネズエラ政府はこれに対抗し、川の反対側に前線基地を設立、エルドラドと命名した。ベネズエラとイギリスは川を挟んでにらみ合いを続け、緊迫の度合いが増していった。こうした一連の争いがアングロ・ベネズエラン国境紛争である。1895年、アメリカがこの紛争の仲介に乗り出した。結局、ロライマ山はイギリス、ベネズエラ、ブラジルで三分割されることになった。だが、エルカジャオやエルドラド前線基地、エンジェル・フォールズのある一帯はベネズエラ領となった。エルドラド刑務所は、エルドラド前線基地が発展解消したものだった。

イギリス側から見れば、オリノコ川南岸のギアナ地方は、イギリスが三百年間、狙い続け、憧れ続けたにもかかわらず、結局、獲得できなかった幻の土地となったのだった。

私は歴史とは無縁と思っていたベネズエラのグアヤナ地方（ギアナ地方）にこれほど大きな侵略の足跡があったことに驚いた。私が調べたこれらの歴史は、『黄金郷（エルドラド）伝説――スペインとイギリスの探険帝国主義』（2008年）というタイトルで中公新書から上梓した。帯には「探険はロマンではなく侵略の道具だった」という文言をつけたが、それこそ私がグアヤナ地方の歴史をひもといて実感した言葉であった。

今日、テレビが放送する「ギアナ高地」の映像はいつも自然賛美に終始している。日本人だけでなく、アメリカ人もヨーロッパ人もその風景に魅せられているが、もはやほとんどの人はエルカジャオやエルドラドのことは知りもしないだろう。しかし、ハリウッドが「ギアナ高地」に憧れて作った『アバター』は、奇しくも遠い宇宙の資源を狙う侵略の話だった。険しい峡谷や密林に分け入る行為は憧れとともに侵略がともない、資源のための侵略は過去ではなく、未来のテーマであることを『アバター』は露呈していたのだった。

（やまだ　あつみ　歴史研究者・美術史家）